

KNOW

NEWS LETTER

NEWS LETTER NEWS LETTER NEWS LETTER NEWS LETTER NEWS LETTER NEWS LETTER NEWS LETTER NEWS LETTER NEWS LETTER NEWS LETTER NEWS LETTER NEWS LETTER NEWS LETTER NEWS LETTER NEWS LETTER

2017.8
第97号



公益財団法人
麻薬・覚せい剤乱用防止センター
Drug Abuse Prevention Center



競輪の補助事業

この冊子は、競輪の補助により作成しました。
<http://hojo.keirin-autorace.or.jp>



NEWS LETTER

2017.8・第97号

CONTENTS

随想

- 薬物乱用を若者で考える
一般社団法人 偽造医薬品等情報センター 事務局長 高梨 宏 1
- かいせつ
- 安心して「クスリがやめられない」といえる社会を目指して
国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部 松本 俊彦 2
- 街頭キャンペーン・厚生労働大臣メッセージ 5
- 全国にコダマする「ダメ。ゼッタイ。」の合言葉 6
- 国際薬物規制100年「過去からの物語」シリーズVII
- 「1900年代初頭：もうひとつの麻薬密輸の物語」
(公財)麻薬・覚せい剤乱用防止センター理事 藤野 彰 40
- 平成28年中の薬物情勢について 44
- 啓発資材のご案内 51
- ご寄付団体及び賛助会員 52

薬物乱用を若者で考える

一般社団法人 偽造医薬品等情報センター
 事務局長 高 梨 宏

毎年6月中旬から「ダメ。ゼッタイ。」普及運動として全国各地で薬物乱用防止のためのキャンペーンが開かれます。国民一人一人の薬物乱用問題に関する認識を高めるため、正しい知識の普及、広報啓発を全国的に展開していくものです。

薬物乱用を若者に焦点をあて考えてみたいと思います。現在はネット社会でもあります。あらゆる情報が瞬時に手に入ることが出来ます。しかし、情報は全て正しいわけではなく、誤の情報も沢山あります。誤の情報に騙されないためには、まず事実を知らなければなりません。判り易い例を示します。シンナーを吸引するアンパン遊びは皆さんもご存じだと思います。この遊びは昭和時代に社会問題となりましたがそれに代るガスパン遊びは、今でもニュースになることがあります。ボタンガスの吸引で酩酊感を味わうというものです。ガスライターの補充ガス、家庭用コンロのボンベなどから吸引します。若者は、退屈を紛らわせるため、反抗心を表すため、どんなものか試してみる等の理由から身近なものに手を触れます。きっかけは魅惑的な情報(罎)からです。しかし、その恐ろしさは知らないのです。有機溶剤やガスに含まれる化学物質は肺を通り速やかに血液に入り脳に到達し、身体や精神に障害を与えます。また、酸欠状態で酩酊感が出るので呼吸困難で突然死も引き起こします。一緒にタバコでも吸えば引火し爆発し、他人を巻き込む危険性もあります。悲惨

なのは、長期的影響で筋肉は衰弱し、方向感覚はなくなり精神状態もコントロール出来ず回復不可能な状態となります。一度なら大丈夫と思わないでください。神経的にも肉体的にも依存があり、行動異常、精神障害、臓器障害を引き起こします。「遊び」という言葉の誘惑には要注意です。

合法ドラッグや脱法ハーブは、まさに罎の情報です。罎の情報を打ち消すため「危険ドラッグ」の呼称にし、取締りを強化した結果、販売店は壊滅され、ニュースに取り上げられることも、少なくなりました。「指定薬物」とは、中枢神経系の興奮若しくは抑制又は幻覚的作用(当該作用の維持又は強化の作用を含む。以下「精神毒性」という。)を有する蓋然性が高く、かつ、人の身体に使用された場合に保健衛生上の危害が発生するおそれがある物と、定義しています。「精神毒性」とは、妄想・幻覚・精神錯乱等が起こる状態です。現在も「毒」を説明することなく危険と思われるものを販売しているサイトがいくつも存在します。指定薬物をパッケージだけ変えて販売する輩(やから)もいます。シバガスと称し笑気ガスをパーティーの風船を膨らませるボンベとして販売し実は吸引目的で使用させるといふものが出回った事があります。笑気は、麻酔剤として承認されている成分です。(シバガスは指定薬物です)性的興奮を高める為に「Rush」といった亜硝酸エステルを吸引させたりもします。植物に「葉機法なし」と、精神毒性のあるベニテングダケやサボテ

ンの一種の乾燥片を販売するものもあります。若者は、おしゃれなパッケージやネーミングでドラッグへと誘われます。危険な遊びが危険な人間関係へ、危険な場所へ、さらに強力なドラッグへと連鎖していく事を若者も大人も知るべきです。一度、危険な人間関係に入るとそこは隠語を使い隔離された世界となります。草やコーク、スピード、シユガーなど数えきれないほど違法薬物の隠語があります。それが仲間を識別する隠語としてSNS等で拡散していきます。

医薬品の乱用も同様で、最近のサイトで危惧しているものがあります。通称スマドラを推奨するサイトです。スマートドラッグ(頭よくなる薬)と称して脳循環改善剤等を通常の用量よりも多量に服用し、また数種類の医薬品を併用することも薦めています。開発までに検討されていない使い方は、どんな影響がでるのか不明です。海外では学生の間で大流行していることもあり日本の若者も買い求めている可能性もあります。また、精神トリップ薬を紹介するサイトもあります。セロトニン作動性抗不安薬や非ベンゾジアゼピン系鎮静・睡眠薬を紹介しています。トリップとは、「麻薬等で幻覚作用を見ることが」と理解出来ます。本来、医薬品は疾病の治療に用いるものであり、目的外使用すれば薬物乱用です。これらのサイトは、個人輸入代行会社に繋がるものです。簡単にアクセス出来るという点では、違法薬物より危険かも知れません。

薬物乱用の怖さを知ってもらうには、「薬教育」が重要と考えています。私たちも「事実」を丁寧に判り易く、伝えていこうと思います。

松本俊彦

はじめて——誤解されている病氣

昨年の5月、ある著名人が覚せい剤取締法違反で逮捕されました。その際、その人が逮捕される際に麻薬取締官にいった、「ありがとうございますます」という発言が、マスメディアのあいだでちょっとした話題になったのを覚えているでしょうか？ 私はこの一件を一生忘れないでしょう。というのも、この一件に関して、あるワイドショー番組でタレント・コメンテーターがしたコメントに、私は心底腹が立ったからです。そのコメントとは、「ありがたいなんて軽いね。反省が足りない」というものでした。

これまで私は、何人もの覚せい剤依存症患者が、「逮捕された瞬間、思わず『ありがたい』っていつてしまった」と苦笑まじりに語るのを聞いてきました。そしてその理由を聞くと、みな一様にこういいました。「これでやっとクスリがやめられる、もう嘘をつかないでいい。そう思ったら、何だかホッとしました」と。

要するに、あの「ありがたい」という言葉は、その人がそれだけ悩んでいた、苦しんでいたということを意味するものなのです。「軽い」「反省が

足りない」などという批判は見当違いもはなはだしいというべきでしょう。

それにしても、つくづく薬物依存症者は誤解されていると思います。たとえば、ある薬物依存症者が「やめられない」と告白した状況を想像してください。その状況、専門家であれば、「よくいえたね。回復の第一歩だよ」と褒めるところです。しかし、世間一般の反応はどのようなものでしょうか。おそらく「反省が足りない」と非難され、それまでの業績や人格を否定され、社会から排除されるのがオチです。

しかも、そのような「辱めと排除」は、しばしば「犯罪抑止」という理由から正当化されています。曰く、「どうせ治りっこない薬物依存症の治療なんか力を入れるより、新たに薬物依存症を作らないことに注力した方が効率的だ。それには、取り締まりの強化に加え、薬物犯罪をおかした人への社会的制裁こそが抑止力となる」。

本当にそうなのでしょうか。社会的制裁が薬物犯罪の防止に有効である、という科学的根拠は存在するのでしょうか。

薬物戦争敗北宣言

国内メディアは不思議と取り上げませんが、いま世界中の多くの国が、かつての薬物依存症者を辱め、排除する政策を反省しています。

歴史的に見ると、最初に「辱めと排除の政策」をとったのは米国でした。1971年、ニクソン大統領は、ニューヨーク市における薬物乱用者の増加を憂い、「米国人最大の敵は薬物乱用だ。この敵を打ち破るために、総攻撃を行う必要がある」と述べ、薬物犯罪の取り締まり強化と厳罰化という「薬物戦争」政策を開始したのです。

その結果はどうだったのでしょうか。

統計データが明らかにしたのは、実に皮肉な結果でした。取り締まり強化に莫大な予算を投じたにもかかわらず、世界中の薬物消費量は増加の一途をたどり、薬物に関連する犯罪やそれによる受刑者、そして死亡やHIV感染症などの健康被害が激増したからです。そして、厳しい規制が闇市場に巨大な利益をもたらし、かえって反社会的組織を大きく成長させてしまっていたのです。

こうした検証結果を踏まえ、「戦争」開始から40年を経過した2011年、薬物政策国際委員会

といえる社会を目指して

安心して「クスリがやめられない」

(各国の元首脳などからなる非政府組織)は、あの重大宣言をしました。それは、「薬物戦争にもはや勝利の見込みはない。この戦争は完全に失敗だった」という敗北宣言でした。さらに同委員会

は各国政府に、薬物依存症者に対しては刑罰ではなく医療と福祉的支援を提供するよう提言をしたのです。世界保健機関もこの動きに呼応しました。2013年に公表したHIV予防・治療ガイドラインのなかで、各国に規制薬物使用を非犯罪化し、刑務所服役者を減らすよう求めるとともに、薬物依存症者に適切な治療、および、清潔な注射針と注射器を提供できる体制を整えることを提案したのです。

要するに、「辱めと排除」による薬物犯罪の防止は、いまや国際的には時代遅れとなっているわけです。

ポルトガルの薬物政策

こうした提言の背景には、ポルトガルが行った大胆な薬物政策の成功がありました。

2001年、ポルトガル政府は、あらゆる薬物の少量所持や使用を許容することを決定しました。そのうえで、薬物を使用する人たちが刑務所に収容して社会から排除するのではなく、依存症治療プログラムや各種福祉サービスの利用を促すとともに、社会での居場所作りを支援し、孤立させな

いことを積極的に推し進めたのです。

具体的には、薬物依存症者に対する就労斡旋サービスの拡充、薬物依存症者を雇用する経営者への資金援助、さらには、起業を希望する薬物依存症者に少額の融資などです。いいかえれば、これまでに薬物依存症者を辱め、社会から排除するために割っていた予算を、逆に彼らを再び社会に迎え入れるために割り当てたわけです。

もちろん、反対意見もありました。それは、「非犯罪化によって、より多くの若者たちが薬物に手を染め、治安の悪化を招くのではないか」という懸念です。

しかし、結果的に、この実験的政策は劇的な成功をおさめました。政策実施10年後の評価において、ポルトガル国内における注射器による薬物使用、薬物の過剰摂取による死亡、さらにはHIV感染が大幅に減少し、治療につながる薬物依存症者も著しく増加しました。しかし、何よりも最も重要な成果は、十代の若者における薬物経験者の割合が減少したということです。

ポルトガルの成功が意味するのは何でしょうか。それは、薬物問題を抱えている人を辱め、排除するのではなく、社会で包摂すること、それこそが、個人と共同体のいずれにとってもメリットが大きい、という事実ではないでしょうか。

誰もが依存症になるわけではない

ところで、人はなぜ薬物依存症になるのでしょうか。

多少とも見識のある方ならば、おそらくこう答えるはずです。「依存症の原因は、性格や意志の弱さなんかじゃない。薬物に手を出したからだ。その結果、薬物の強烈な快感が脳に刻印付けされてしまい、脳が支配されてしまっているからだ」と。

なるほど、その通りです。確かに依存症になりやすい性格傾向など存在しませんし、薬物を使っただけで、脳が支配されてしまっているからだとはいえません。

しかし、この回答では100点満点で50点です。なぜなら、その回答では、「薬物に手を出しても依存症になる人とならない人がいる」という事実を説明できないからです。

たとえば、アルコールはれっきとした依存性薬物ですが、それでも依存症になるのは飲酒者のごく一部です。また、睡眠薬でも依存症になる人がいますが、それも使用経験者の一部にかぎられます。さらに、重篤な外傷や外科手術後の鎮痛のために病院で麻薬を投与される患者はたくさんいますが、その大半は依存症にはなりません。

実は、覚せい剤の場合も同じなのです。覚せい剤依存症患者の大半は、最初のうちは仲間と一緒に覚せい剤を使っていたのに、気づくとひとり取り残されてしまった人たちです。彼らはよくこう

愚痴ります。「昔、一緒にクスリをやっていた奴は、今じゃみんな家庭を持ってちゃんと家族を養っている。いまだクスリから抜け出せないのは自分だけ。どうして自分はダメなのか……」と。

なぜ依存症になる人とならない人がいるのでしょうか。

「ネズミの楽園」が教えてくれること

興味深い実験があります。1980年にサイモン・フレージャー大学のブルース・アレグサンダー博士らが行った、「ネズミの楽園」と呼ばれる有名な実験です。

この実験では、ネズミは、居住環境の異なる二つのグループに分けられました。一方のネズミは、一匹ずつ金網できた檻の中に（「植民地ネズミ」）、そしてもう一方のネズミは、広々とした場所に雌雄十数匹が一緒に入れられました（「楽園ネズミ」）。

ちなみに、楽園ネズミに提供された広場は、まさに「ネズミの楽園」でした。床には、巣を作りやすいように常緑樹のウッドチップが敷き詰められ、いつでも好きなときに食べられるように十分なエサも用意されました。また、所々にネズミが隠れたり遊んだりできる箱や缶が置かれ、ネズミ同士の接触や交流を妨げない環境になっていました。

アレクサンダー博士らは、この両方のネズミに対し、普通の水とモルヒネ入りの水を用意して与

え、57日間観察したわけです。その結果は実に興味深いものでした。植民地ネズミの多くが、孤独な檻の中で頻繁にモルヒネ水を摂取しては、日が一昨日酩酊していたのに対し、楽園ネズミの多くは、他のネズミと遊んだり、じゃれ合ったり、交尾したりして、なかなかモルヒネ水を飲もうとしなかったのです。

この実験結果こそが、「なぜ一部の人だけが薬物依存症になるのか」という問いの答えではないでしょうか？ それは、自分が置かれた状況を「狭苦しい檻」と感じている人の方が、「楽園」と感じている人よりも薬物依存症になりやすいということ、つまり、しんどい状況にある人ほど依存症になりやすいということです。

おわりに——安心して「やめられない」といえる社会

「ネズミの楽園」実験には続きがあります。

アレクサンダー博士らは、檻の中でモルヒネ水ばかりを飲んで酔っ払っていた植民地ネズミを、今度は、楽園ネズミのいる広場へと移したのです。すると、彼らは、広場の中で楽園ネズミたちとじゃれ合い、遊び、交流するようになりました。

それだけではありません。驚いたことに、檻の中ですっかりモルヒネ漬けになっていた彼らが、けいれんなど、モルヒネの離脱症状を呈しながらも、いつしかモルヒネ水ではなく、普通の水を飲

むようになったのです。この実験結果が暗示しているものは、一体何なのでしょうか。

私はこう考えています。それは、薬物依存症から回復しやすい環境とは、「薬物がやめられない」と発言しても、排除もされなければ孤立を強いられることもない社会、むしろその発言を回復の第一歩と見なし、応援してもらえる社会であるということです。

一言でいみましょう。それは、安心して「やめられない」といえる社会なのです。